

桜部 建著

「俱舎論の研究 界・根品」

平川 彰

本書は新しく発見せられた俱舎論の梵文原典にもとづいた研究である。俱舎論の梵本は、一九三五年に Rāhula Saṅkītyāyana によって、チベットの Ngur 僧院で発見された。そのうち偈文のみは、一九四六年 V. V. Gokhale によって出版されたが、論 (Bhāṣya) の出版はおくれていた。そして一九六七年になって、ようやく P. Pradhan, Abhidharmakośa-bhāṣya, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna 1967 として出版された。しかしこの書の本文の組版はすでに十年以上も前にでき上っていたので、桜部建博士はジャヤスワール研究所の所長故アルティカー博士の好意により、かねてからの梵本のコピーを入手され、研究をすすめてこられたのである。そしてその研究がみもつて、大谷大学に提出された学位論文となったのである。本書はその学位論文の一部分であるという。俱舎論の梵文原典にもとづいた研究としては、本書が最初であり、学界への大きな貢献である。

しかも本書の背後には、博士がこれまで長年にわたって、有部のアビダルマについて研究をすすめてこられた成果がふくま

れているのであり、歴大なる有部アビダルマ論にたいする徹底した研究成果をふまえて、本書が成立している。本書の内容は二部にわかれており、第一部は、俱舎論を頂点とする「有部アビダルマの体系」の成立史的研究であり、原始佛教にさかのぼって、アビダルマの思想的発展が解明されている。それによって、俱舎論の界・根二品に示されている「法の体系、および組織」が、有部アビダルマの体系の完成態であることが論証されている。

第二部は、ラーフラによって発見された俱舎論梵本の界・根二品の翻訳と註記とである。俱舎論は「破我品」を加えて九品あるが、アビダルマの法の体系・組織は、はじめの界・根三品に示されている。本書では、この二品を「原理論」を説くものと理解し、つぎの三・四・五品と、六・七・八品の第二部、第三部は実践論であつて、第一部の原理論がその基礎になっていると見る。これが本書(一一頁)の見解であるが、広く学界でも認められた説である。したがって本書が、「俱舎論の研究」と題しながら、とくに界・根二品を取り上げたのは理由のあることである。そのために本書では、第二部に界・根二品の梵文の翻訳と註記とをおこなっており、これをふまえて、第一部の研究がなされているのである。

本書の第一部は、「序説」・第一章「阿毘達磨俱舎論の背景」・第二章「俱舎論 界・根品の内容」の三部分からなっている。第一の「序説」では、これまでの有部アビダルマ論書の研究の

問題点を指摘し、本書の立場を明らかにしている。すなわち木村泰賢博士以来、有部アビダルマ論書の研究は非常に進歩してきたが、しかしそれはもっぱら論書の形式的発達の面の究明、すなわち資料的研究が主であった。有部アビダルマの思想・教理の発展、教理の内容の研究は、これまで充分になされていなかった。これにたいして、本書（一〇頁）の立場は「成立史的研究」であるとうたわれている。これは、本書が有部教理の思想的発展、内容的研究に主眼をおいているからである。ここに本書の特色がある。

俱舎論のみによって、有部の教理を理解することは困難ではないが、しかし俱舎論にいたるまでの思想的発展を跡づけることは容易でない。それは、有部アビダルマ論書の量があまりにも膨大であるからである。しかもそれらの論書の年代的前後は不明であるから、それぞれの論書にのべられている教理の発達形態に即して、論書の新古を決定しなければならない。そのためには、無数に多くの教理について、それぞれの論書の解釈を精査し、その新古を決定しなければならない。しかしこれは短日月にできることではない。本書の著者のごとく長年にわたって、アビダルマ研究にとりくんできた学者によってのみ、はじめてなしうることである。

つぎに第一章「阿毘達磨俱舎論の背景」は、俱舎論において「アビダルマの体系」が完成するまでの「前史」を説明した部分である。本書では阿舎にさかのぼって、アビダルマの萌芽を

発見し、それが有部のアビダルマ論書に、いかに発展していたかを、論書に即して明らかにしている。本章は三節に分れている。すなわち第一節にアビダルマの起源を論じ、第二節に阿舎中のアビダルマの形態を明らかにし、第三節に有部の論書をアビダルマの発展に即して、新古の位置を確定している。著者はまず「アビダルマ」という言葉の原意が何であったかを取り上げ、アビダルマの原意は「法について」という意味であったとするガイガー等の説に賛意を表しておられる。これは、パーリ上座部よりも、有部あるいは俱舎論などの解釈の方が原意に近いことを意味する。「アビダルマ」という言葉は阿舎時代に現れたのであるが、そのときにはまだ後世の「論藏」という用例はなかったであろう。そのために部派仏教時代には、この語に種々の意味が与えられたのであろう。摩訶僧祇律に「阿毘曇とは九部修多羅なり。毘尼とは広略の波羅提木叉なり」（大正二二、三四〇下・四七五下）等とあって、阿毘曇をもって九分教を指す用例があることも、この点から理解できる。

法の研究、分別 (Dharmaprayicaya) としてのアビダルマが、すでに阿舎経に現れていることは、多くの学者の認めるところである。著者はそういうアビダルマの原形を、阿舎中の *abhidhammakatha* に認め、*nāṭhā* は教法を「まとめる」意味だけであるので、アビダルマの原形としては充分でないことを論証している。著者は現存阿舎を検討して、これは教義学的性格のものであり、アビダルマの性格のものであると規定し、それ以前に佛陀の教えを生のままでつたえていた *Uṭṭāgama*

があつたと想定する。たしかに著者の指摘するように、現存阿舎にはアビダルマ的性格が、随処に現れている。そしてまた阿舎は、論蔵的な傾向の声聞により伝持され、整理されているから、そういう着色がなされていることはたしかであろう。著者は、阿舎のアビダルマ的性格として、法教によるまとめ、相応によるまとめ、分別・広積の諸經典を示している。そういう点は、著者の言われる通りである。しかし現存阿舎にも、法句経やスッタニパータなどに示される教説、あるいは大般涅槃經などに見られる佛陀の晩年のいきいきとした描写などを見ると、現存阿舎が本質的にアビダルマ的であるとい切れるであろうか。あるいはまた逆に「法の簡訳」*dharmaṇaṃ pravacayam* という性格が、佛陀の悟りに本来ふくまれていたのではなからうかという問題もある。たとえば「四種記問」や分別と中道の関係、あるいは上座部が佛説を「分別説」ととらえている点など、佛陀の悟りの性格とアビダルマとの関係が研究されねばならないと考える。すなわちアビダルマの起原は佛陀にあつたのか、あるいはこれは、仏陀のあづかり知らないもので、弟子の創作であつたと見るべきであろうか。これはアビダルマを仏説とみる世親のアビダルマ観を理解する核心でもあるので、もう少し著者の見解を期待したかった。

なお本書のシャマタデーヴァの俱舍論註所引の經典の研究は貴重な成果である。これによって、部派時代の阿舎にいろいろな性格があつたことが知られる。

第二節で阿舎中のアビダルマの在り方を明らかにしたので、

第三節ではそれにつづく有部論書の位置づけがなされている。まず著者は、「六足・発智」という在来の有部論書の見方を否定している。これは有部論書を理解する上に重要なことである。ついで著者は、有部の論書を三つの発展段階に位置づけている。すなわち阿舎につぐ有部論書は集異門論であり、それに次ぐのは法蘊論であるとする。一般には施設論もこの二書と同列におかれるが、著者はこの論の内容を検討して、第二期の論書に入れている。集異門論が有部論書の中で最も古いことは、たしかであろう。最近、集異門論の梵本を出版したローゼン女史は、これを衆集經の註釈と見てゐる。(V. S. Rosen, *Saṅgīṭisūtra und sein Kommentar Saṅgītiparyāya 2 Teile*, Akademie Verlag, Berlin 1968.)

つぎに第二期の論書を、著者は(1)識身、界身、施設、(2)品類、(3)発智、尊婆須蜜菩薩所集、(4)大毘婆沙・鞞婆沙、(5)甘露味の五類に分けている。このように五類に分ける論拠が明示されているが、これは著者のように論書の内容を精査した学者によってのみ、はじめてなしうることである。これまでも有部論書の新古を論じた学者は多いが、本書ほどに詳しく、また具体的に論じているものはないといつてよい。一一の論書についても、簡明にその特徴が示されている。たとえば品類論については、これは世友の著としてこれまでにも注目されてきた論であるが、しかしこの論書ははじめから一書としてまとまっていたものではなく、独立していた論のよせ集めであるらしいこと、この論に説かれる五位の体系、十智、諸門分別、九十八随眠などに

いて、本論にそれ以前の論書から一步すすんだ説があること、さらに五位説は、これまでの学界でとくに重要視されていた品類論の教理であるが、しかしその萌芽は、すでにそれ以前の集異門論や法蘊論などにも見られることなどを、簡明に指摘している。此処などにも、著者の有部論書への深い学殖が示されている。なお品類論の弁五事品については、最近梵文断片が公刊された。(J. Imanishi, *Das Pañcavastukam und die Pañcavastukavibhāṅgā, Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, I Philologisch-Historische Klasse, 1969, Nr. 1*)

本書は俱舍論において完成した「法の体系」を終局とする有部論書の研究であるため、パーリ論書との比較がないのはやむを得ないであろうが、しかしこれらの有部論書に関して、成立年代について、何等かの見解を期待することは無理であったであろうか。あるいはフラウワルナーの提起した世親二人説などについても、俱舍論の著者とも関連して、著者の見解が聞けたら幸いであった。

つぎに第二章「俱舍論 界・根品の内容」はこの二品に取りあつかわれている教理の研究である。すなわち俱舍論以前の有部論書で発達していた教理が、俱舍論で大成したことを、界・根二品の内容の考察より明らかにしている。著者はまず、界・根二品の内容を十一の項目にまとめ、その意義を考察し、その六番目に位置している「二十二根の解説」は(二十二根があ

るから、根品の名を得ているのであるが)、俱舍論が解明しようとしている「法の理論」の体系には、余分なものであることを指摘している。これはたしかに著者の言われる通りである。

法の体系とは「五位七十五法」のことであるが、著者はまず、この「五位」の呼び名が有部の論書にないことを指摘しておられる。俱舍論の梵本にも「位」に相当する語がない。かかる指摘は、梵本を依用して研究して、はじめて論断しうることであり、本書のすぐれた特徴の一つである。称友釈(p. 122)には「Pañca-vastuka の語があるが、俱舍論そのものには、使われていなかったらしい。上記今西氏の五事論には、*Pañca dharmāḥ*」と出ている。「位」の原語は *avasthā* である場合が多いが、この場合の五位には、この語は適切でない。その点からも「五位」の語が、シナや日本でできたことが推知されるが、これをはっきりと指摘したのは、著者の大きな功績であると考えられる。なお著者は、五位と三科の関係、五位説の起原などについても明快な解釈を示し、五位説が、集異門論や法蘊論を通じて、次第に形成されたものであることを論証している。

俱舍論では、法は *svakṣaṇadharanād dharmāḥ* と定義されている。これと同じ定義が、雑阿毘曇心論にもあることを、著者(七八頁)が指摘しているのは、大きな収獲である。これと同じ定義はプラサンパダー(p. 304, etc.)にもある。さらにパーリの *attano lakhaṇam dhārentīti dharmā,* (*Visuddhimagga* XV, 3, p. 408) という定義も、意味の上では同じと見てよい。したがってアビダルマ時代に、広くかかる

解釈がおこなわれていたのであろう。さらに「五見」は、有部アビダルマになって、はじめて成立したという指摘（八二頁）、不定法を八法とする普光の説が正しいことの論証（七九、八四頁）、不相応行の研究、有部の物質観の解明、法の俱生の問題、六因四縁五果の問題等、本書には注目すべき研究成果が多い。すべての場合において、教理の発展の究明が、論書に即してなされており、本書が有部教理の研究に貢献した功績は大きい。

本書（一〇八頁）には「三世実有と刹那滅」の研究があるが、周知のごとくこれは俱舍論では「随眠品」や「業品」に説かれるものであり、界・根二品にはそれを予想した説があるのみである。本書が界・根二品をとり上げながらも、三世実有と刹那滅に言及せざるを得なかったのは、有部の法の性格がこの二つの教理に密接に関係しているからである。その意味では、六因や五果の問題も、業品や随眠品と関係が深いといわねばならない。われわれとしては、桜部博士がさらに研究をすすめられて、俱舍論全体の研究を大成されることを望望するものである。

本書の第二部（一二五頁以下）は、界・根二品の本文の訳註

である。プラダンの出版した俱舍論梵本は、破我品をもふくみ、四七九頁の大冊である。この中、界品は三七頁、根品は七三頁（三八―一〇頁）であり、全体の約四分の一である。本書では、この梵本を、漢訳二本、チベット訳、フランス語訳、称友疏、安慧疏、シャマタデーヴァ疏等と比較しつつ、訳出し、註をつけている。入念な翻訳であり、学者を益する点、多大であると思う。ともかく俱舍論の梵本が出版されない前に、すでにその翻訳が公表されるほどに、わが国の俱舍学の水準は高いのである。しかし卒直に言って、日本に俱舍を専攻する学徒が多いとは言えない。今後、本書の公刊を契機に、俱舍論の研究にすすむ学徒が多教輩出することを念願したい。梵本が出版された現在、俱舍論研究の資料は出そろったと言ってよいのである。なお本書には、巻末に、俱舍論の梵本、旧訳、新訳、チベット訳（北京版）の対照表が添えられており、研究者のために、行きどいた配慮がくばられている。

（昭和四四年三月刊 本文四二〇頁。索引・諸本頁数対照 一八頁。法藏館、A5版、三、五〇〇頁）